

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Ayşe Nur TEKMEŒ (テキメン・アイシヌール) (トルコ)
- (2) 年 齢 : 49 歳
- (3) 参加事業 : 第 4 回「世界青年の船」事業 参加青年 (1991 年度)
- (4) 職 業 : トルコ アンカラ大学 言語歴史地理学部 日本語・日本文学
科教授、遠隔教養学部 副学部長



■ 参加のきっかけ

トルコ共和国立アンカラ大学、言語歴史地理学部、日本語日本文学科の学部生として 2 年目が終わった 1991 年の夏休みのことでした。学部生全員の中から 4 人が選ばれ、トルコ青年スポーツ省に推薦されるという連絡、それに加えて第 4 回「世界青年の船」事業（以下、「世界船」という。）のプログラム案内書が届きました。案内書には第 4 回世界船のプログラムの内容や活動に関する欄、そしてその目的などが書かれており、それを読んだ私は、心から参加したいと思い、すぐさま参加の意向を学科の先生方に伝えました。プログラムの内容が非常に充実したこと、世界の各国の青年と交流できることが非常に魅力的でした。当時の私はまだ海外経験もなく、高校、大学で、講演などのようなプログラムで、何度か外国の方に接したことがありましたが、世界船のように何週間にもわたって、大勢の国の若者と協力しあって様々な活動をしたことなどはありませんでした。ですから世界船のような内容を持つプログラムは、自分の視野を広げる良い機会だと思いました。

■ 日本に関心を持つきっかけは何でしたか。

日本にいつから関心を持っていたかは覚えていませんが、私が 5、6 歳で「キャンディ・キャンディ」や「アルプスの少女ハイジ」を見た記憶があります。母が幼児教育に携わっていたこともあり、母と私で見えていたのですが、母がこれは日本のアニメだと教えてくれました。7、8 歳の時にアメリカのサムライドラマを家族で見っていたことや、中学 2 年生の時、母親が「これ日本語じゃない？」と買って来た T シャツに書かれていた文字が読めたことを覚えています。しかし「日本という国が遠くにある」という認識があるくらいでした。高校で英文学やドイツ文学の勉強もしていたのですが、別の言語をやってみたくなり、友人が「日本語は日本人しか話せない、すごく難しい言語だ」と言うのを聞いて、やってみたいと言う気持ちになり、大学で日本語学科に入りました。当時、アンカラ大学が日本語学科を持っている唯一の大学でした。世界船で福島県を訪問し、ホストファミリーに初めて聞いたのが、「キャンディ・キャンディの言葉（歌詞）は何ですか？」でした。そして書き起こしてもらい、みんなで歌ったのを覚えています。

■ 船という一つの国ができた

270 人の若者全員が一緒に船に乗り、航行を体験しながら生活するというのは、本当に素晴らしいアイデアだと、今でも思います。船という狭い世界で私たちは他文化世界を認識し、宗教・国・思想の違い関係なく世界船の世界に入り込み、日本人やトルコ人ではない、「**にっぽん丸人**」になったのです。最初に日本で各国の青年に会った時には、それぞれの国の人という感じで、乗船直後もまだそんな感じです。グループ活動やディスカッションを経て、寄港地でイベントをやっ

たりして、国という境界線がなくなっていました。第 4 回世界船のソングまで作られていました。30 年経っても、いまだに言葉の一つも迷わず歌うことができます。

第 4 回世界船は期待を遥かに超越した、**先のその先を見抜いた発想を持つプログラム**だったと思います。船で長旅に出ると聞いた当初は、「なぜ？」と思いました。青少年向けのキャンプなどがありますが、私たち以外の周りは海、という別世界に行く、その点は新しい発想だと思いました。ディスカッションなど忙しい毎日を送っていましたが、忙しさの中でデッキに出ると他には何も無い。一つの村にいと、村で行けるところは限られていますが、船では寄港地ごとに違う文化に接することができます、誰も知らない文化を知ることができます。そしてもし村だと空間の広さが違っていたと思いますが、船は狭く、キャビンはもっと狭いところで、3 人で共有します。私は日本人 2 人と私だったので、嬉しかったのですが、他のキャビンは 3 人とも違う国の人、宗教も考え方も違うというのが、すごいなと思いました。最初はそれぞれの国が別々にあって、船に乗ることでメルティングポットの過程が始まり、スペインで外国青年の半数が下船する時とても心が痛みました。**若者をさりげなく自然に「若者文化」の中で溶かし、一つの青年の船の概念に馴染ませる**ということが、起きていました。外からは「若者が遊んでいる」と思われるかもしれませんが、西洋哲学者のホイジンガは、「動物は遊んで学ぶ。同じく人間も遊んで学ぶ」と言っています。私たちは**若者として、十分に遊んで学んだ**要素があると思います。その中で、慎重なディベートもあれば、強い言葉も出て、その結果として喧嘩せずメルティングポットの要素となって終わりました。これは船だからこそできることです。日本文化を学ぶ機会だけでなく、異文化交流を強める機会でした。

世界船は、現在いまだに世界の青年を対象に行われているプログラムの中でも比肩するものがないほどの成果を生み出した素晴らしいプログラムであると思います。この考えのもと、乗船の時に研究者から受けた様々なセミナーを思い出しでは、いつか世界船にアドバイザーとして参加したいと何回も思ったこともあります。



和太鼓の練習成果を披露（筆者後列）

「にっぽん丸人」になれたのは、なぜなのでしょう。

乗船中、世界の各国から集まった様々な文化背景を背負っている 270 人の若者が、みな一緒に同じルールに従い、同じ事業に参加し、それぞれのグループ活動において、その場、その空間を共有し、グループごとに息を合わせながら日々を過ごし、そんな中で訪問した国々においては現地施設訪問、ボランティア活動などの様々なプログラムに参加し、そして国の区別などなく、一つの目的に向かって力を合わせ、意見を交換し、協力し合いながら様々な課題をクリアしていったからなのです。そうすることによって、それぞれの文化背景を持つ人々の経験が一体化し、**世界船というひとつのまとま**

り、すなわちあたかもひとつの国としてか感じられるようになったのです。航行中は、モーニングコールからはじまり、朝の体育時間、ディスカッションタイムなどの様々な活動を経て共同主観（共同認識）が自ら作られ、またチームワークを基本として、それぞれが協力しあって何らかを計画し、それらを実行に移す機会が非常にたくさんありました。**共同主観とは、個人の差や文化の差がありながら、同じ空気を吸って、吐いて、息合わせをしていく**感じです。青年向けのプログラムが多い中で、世界船に参加できたことはラッキーで、後の人生に影響が大きかったと思います。忙しかったけれど、楽しくもありました。狭い空間の中で生きていましたが、**視野は際限なくどんどん広がっていきました**。世界船での経験から学んだものは数多くあります。人間は、人一人、それぞれの特別な背景を持っていても、共同空間を構築することによって共同主観が育てられるのです。一緒に作る、一緒に考える、一緒に目的を果たすために、一緒に努力するということは本当に重要であり、人それぞれの違いこそが力になり、目標達成への鍵となるのです。私は普段シャイな性格なので、乗船時はちょうど 20 歳になる手前で、日本語も話したいけど話せない、色々な異文化が集まっている中で何かを言うのは初めて、どう反応されるのか怖い、自信がない、という状態でした。そこであらゆる場面で観察することが多くなり、**観察力がアップ**しました。観察することで、言い方に文化的な差がある、こう言ったらこうなる、ああいう言い方もある、こう言えばスムーズになったのでは、私もこういうところに気をつけようという意識になりました。**それぞれの人が違うということを考えて、上手に発想すれば、力になる**ということを観察しました。どれだけ自分でできたかは分からない。英語で話している、英語も難しいところがあるが、コミュニケーションを継続する、それぞれの文化の人がそれぞれの個性で、意見を交わす、自分の気に入らないことも出るかもしれない、自分の言うことを、相手は気に入らないかもしれない。初めは他人同士でコミュニケーションにも緊張があるが、その緊張も早く解け、自分の違いを生かす練習になったと思います。自分や自分の周辺国の宗教以外に接することは、その場にいるだけで、若者には勉強になります。私は日本に留学する学生に、「トルコ人だけで固まらず、自分の意見は言えなくても日本人の輪に飛び込み、まず観察しなさい。そうすると自分の価値もわかるから」とよく伝えていました。世界船はよく考えられたプログラムで、世界船プログラムがきっかけで、キャリアパス、スキル向上にプラスになったのではないかと思います。



レターグループの仲間と（筆者前列左から 3 番目）

■ 世界船全体こそが学び

世界船でのプログラムそれぞれは、個別に存在するものですが、実は個々のプログラムというより、**世界船全体こそが、参加者への影響が非常に大きかった**のではないかと思います。私は、世界船では和太鼓や合気道を習得し、文学、音楽のセミナーなどに参加し、日本舞踊などを見学し、女性の権利などの世界の人種共通問題に関するディスカッションに参加したりしました。またナショナル・デーの活動では、参加国の文化について学び、訪問国での様々な活動をし、様々な生活形式の人に出会い、人間、人生などについて考えるようになったのではないかと思います。一方、日本到着から下船まで、日本という国の人々のプログラムの計画・運営・問題解決のし方を近くから観察することができました。世界船プログラムで心が鍛錬されると共に、このように大きなイベントを計画した**日本の物事の捉え方、職種、発想などを体験**することができました。その一つの例としてあげられるのは、トルコ代表団がアンカラを出発「できなかった」日のことです。その日、アンカラは嵐で、飛行機が発着できるような状況ではありませんでした。その影響で乗り換えのイスタンブールの飛行機にも間に合うことができず、実際のところ世界船に参加できない状況に陥っていたのです。しかし、この状況に関する連絡が、見送りにきた日本人の留学生の友達のおかげで在トルコ日本国大使館を經由して、私達がおかれていた状況が内閣府に届き、アンカラからの飛行機が飛べるようになった際、すぐさまドイツのフランクフルト経由で日本に飛び、そして世界船に参加することができたのです。プログラム計画者の大勢の方が、全く知らない他国の若者のために、私達を日本で迎えるために全力を尽くしてくれました。全く知らない人々を、本当に大事に思ってくれていたのです。これ以外にも数々のことを思い出すことができます。私が**日本の真心に初めて出会ったのが世界船**だったのです。

トルコ文化に関する発見はありましたか。

トルコの良さに気付いた面もあります。乗船準備をしていた時、「自分の文化をよく知らない」ことに気づき、ナショナル・デー（国別の文化発表）で何をするか？何をアピールするか？と話し合い、よく考えて練習しました。他のトルコ参加青年とも意見交換して、実は**トルコ国内で地域の差がある**ということにも気づきました。他国のナショナル・デーもみて、これを紹介している、これを全面に出している、ということも学びになりました。スウェーデンの発表では ABBA の紹介をしていたのですが、英語の歌だったのでスウェーデンということを知らずにいました。自分に近いものもそうでないものも、同じ宗教でも文化が異なると違うということも、よく分かりました。

世界船を一言で言うならば、どんな表現になりますか。

世界船でしか得られない経験を簡単に表現するとするのであれば、それは**世界船の心**です。第 4 回のスローガンは「World Friend Ship」で、その後 spirit（精神）と言っているのを耳にし、spirit が一番近いかもしれません。世界船の心というのは簡単に育つものではないと思います。世界船で心がつながっているので、「SWY 人（世界船人）」です。他のプログラムは終わってから人間関係の継続性がほとんどないか、もしくは世界船に比べて継続率が時間が経つにつれ低下していくのが普通です。それ以外にも、同期の人とのつながりがあっても別の年のプログラムの人とのつながりをもたないか、親しい関係にはなれません。しかし世界船の場合、当時はインターネットもなかったのですが、船を降りて 2 週間、みんな泣いたと思います。下船後 1、2 ヶ月後にもう会いたくて、ハンガリーの青年がトルコに来たりと、イスタンブールで会おうという声かけがあったり、トルコからスペインに行ったり、いろいろな動きがありました。同年参加者同士の横のつながりはもちろん、別の年の参加者との国内・国外のつながりまでが存在するのです。そしてこれらは、**いわゆる「同窓会」がなくても自然に成り立っている**ようです。世界船が成功したと思うのは、**30 年経った今でも、仲間に会う時に、他人ではない、心の中に存在している人に会う嬉しさ、会えなくて寂しかった気持ちがある**からです。事業終了で途切れるのではなく、**私たちは 30 年経ってさらに出会ったり学んだりしています**。日本国大使館のイベントに参加した際に紹介された人が、別の回の既参加青年だったこともありました。大使館に長期仕事に来ている人で、出会った時からまるで同じ船に乗って

いるかのように感じる人です。ですから見えないところで世界船のつながりは広がっているのです。

■ 日本研究の土台となった世界船

世界船に参加する前は、「日本」という国は大学で専攻にしている、ただの専門課題でしかありませんでした。そして世界船に参加してからは、日本文化に接し、体験することで人類・文明・文化、もちろん言葉について考え、「日本」は仕事になり、人生となりました。日本の行事实施における協力の仕方、努力、やる気を船で見ることができましたが、世界船のおかげで**他の日本研究者とは全く違う観点から、日本を観察**することができるようになったと思います。研究は自分で進めるべきものと思っていたので、その面ではご迷惑をかけていないのですが、日本に行った時に友達の家を訪問したり、世間話をしたり、日本文化に接したりと、協力をいただいたことがあります。同期で同じグループの研究者がトルコ音楽について研究しているのを知ったり、20年経ってキャビンメイトの娘さんから Facebook でメッセージが来て、「母から話を聞いたので会いたい」という繋がりもできました。文化は言葉で表現されてもその裏が見えないことがありますが、日本の方にお世話になり、外国人がなかなか見られないような習慣を見せてもらったりと、**友人たちが自然に協力してくれた**と思います。建物の土台（基礎）は目に見えないですから、余り話題になりませんが、しかしその土台がなければ建物をしっかり建てることはできません。世界船は私の人生において**一つの土台、柱のような存在**ではないかと思います。

日本文化の紹介にもご尽力くださっています。

私の所属する学科において、私は 2001 年にアンカラ大学内で日本学学生団体（JOT）を設立し、そして 2015 年にこのクラブの名称を日本文化交流団体（JKET）に変えました。設立時から現在まで指導教官を務めています。当団体内では武道・茶道・花道・書道・将棋・舞踊・日本語会話・日本文学・漫画などのクラブがあり、学生がそれぞれのクラブで一年中、鍛錬し、トルコ国内の様々な場所で日本文化に関するイベントを行ったり、在トルコ日本大使館主催の文化祭などに協力し、ボランティアで活躍したりしています。2013 年安倍首相夫妻が訪問し、夫人がアンカラ大学を訪問した際クラブの活動を全てお見せしました。



安倍昭恵夫人と学生たち（2013 年）

最初に立ち上げた時、私は助手で、団体を仕切っていましたが、まだクラブ活動の数も少なかったです。学科の学生が交換留学に行く時、「自分のためだけでなく、残っているみんなのために何か学んできて」と伝えたところ、茶道や華道を学んだ学生がそれぞれクラブを作ったりしました。ある学生は日本の手話を学んできて、「手話クラブを作りたい」といい、2年続けました。卒業後少し途絶えたが、トルコの手話ができる学生が、日本の手話を習いたいと来て、手話クラブが再開し、トルコの歌をトルコの手話で、日本の歌を日本の手話で、教えています。また私が学生の頃から囲碁が流行っており、

一方将棋クラブがなかなか流行らなかったのですが、あるトルコ語研究者に将棋を勧めたら流行り、今はステイホームでもネット上で盛り上がりを見せています。漫画は最初からあり、アニメクラブも作って、作品の面白さを議論したりしています。最近のコスプレも流行しています。2017年、大使館とアンカラ大学、コスプレ団体が共催で日土青年祭を行いました。学生がコスプレのまま30秒アフレコをやるなど、盛んでした。学生に一方的に教えたり宿題出したりもいいのですが、簡単な映画を撮るなど促すと、台本からきっちり作り込む学生もいます。日本文化は言葉だけではないので、自然に身につくスタイルがよいと思っています。

また、2004年から大学での活動とは別に「ANKEN 武道クラブ」をアンカラで設立し、ボランティアで剣道を教えています。この二つのイベントは私がボランティアで世界船の魂をいかして心を育てている場になっているかもしれません。

船で寄った国々でもボランティア活動を行いました。世界船に参加したとき、朝の日本語フレーズのためにステージに立ったり、日本語グループの会議に参加したりしていました。**教えるというのは素晴らしいことだということに初めて気づいたのもその時だった**と思います。日本とトルコ間のビジネスを自分で立ち上げたいと思っていましたので、学者になりたいとは思っていませんでした。その後、興味を持つのはいいことだなと思い、学者は大変だが知恵を持つこと、好奇心や、熱心さによって何かを得られるということは、船で気付けたのではないかと思います。そうでないと、こちらの道に入る勇気がなかったと思いますが、お陰様で楽しい毎日を過ごしています。

■ 30年を経て続く交流

世界船に参加して得たその時の国際的・地域的な人的交流は今も続いています。世界船で日本に関して研究している人が他にもいるのではないかと、今そういう方と繋がっていないのは残念で、「世界船の心」で色々できるのではないかと考えています。別の分野でも、経済研究者などが集まり、イベントや会議を計画できるのではないかと、仕事のつながりを持ってよいのではと思っています。そこが今後の課題かもしれません。個人情報の問題もあるので、ぜひ内閣府で可能なことは、やっていただけると嬉しいです。それから世界船の参加者は平和を大事にする人たちなので、平和関係で自分の意見を言える、船でなくてもネット上のディスカッションができるのではないのでしょうか。また、日本との学生交流もこのような時期だからこそ実施したいです。トルコは色々な文明の交差点であり、時代を一つだけ見ても見えないと思います。オスマントルコからトルコ共和国の歴史、古代文明、遊牧民の歴史があり、色々な文明が重なり、その文明の遺産も地域で続いているため、トルコ人はこうだ、と言えないところがあります。トルコは7つの地方に分かれており、民族踊りが面白いです。習慣がおどりに染み込まれているので、踊りを通じてトルコの情報を入れることもできます。

2019年9月に、日本へあるプロジェクトへ参加するためにいった際、富山大学を訪問する機会があり、大学間交流について意見交換を行いました。そして、日本青年国際交流機構（IYEO）で小さな講演を行ったのですが、そのきっかけは、やはり30年前に乗船した第4回世界船からの友人二人でした。今年の世界船乗船から数えて30年目であり、エジプトでリユニオンが計画されています。また、この間もオンラインで30周年記念イベントがありました。第4回世界船の30周年記念ビデオまで作成されました。**地域的、そして国際的交流はまったく隙間がないかのように続いています。**世界の若者にこのような、人間の心が見える貴重な経験の場を提供してくれた日本内閣府に対し、心より最大限の感謝の意を表したいと思います。

テキメン・アイシェヌール氏（Ph. D）のプロフィール

トルコ・アンカラ大学言語歴史地理学部 日本語・日本文学科教授、同大学 遠隔教養学部 副学部長。アンカラ大学在学中に第4回「世界青年の船」事業に参加。アンカラ大学日本語日本文学科で長く教鞭を取り、数多くの卒業生を送り出し、日本研究者の育成と輩出に尽力したことから、平成29年度外務大臣表彰を受ける。平成25年度グローバルリーダー育成事業（SWY26相当）での日本青年トルコ派遣では、アンカラ大学訪問、学生との交流にも協力。土日基金 日本語・日本文化研究・教育・運営センター長、アンケン武道クラブ指導者（剣道3段）。